

生研 ニュース

PHOTO 倉科満寿夫

IIS NEWS
No.118
2009.6



●副所長
中埜 良昭

IIS
TODAY

今回、表紙に登場していただいたのは、今年4月に生研の副所長になられた中埜良昭教授です。副所長として、キャンパス・施設関係を担当されます。具体的には、駒場Ⅱリサーチキャンパスのユニバーシティ広場の整備や、千葉実験所の柏キャンパスへの機能移転の可能性検討をされるそうです。生研の特徴をお伺いしたところ、「一つの建物の中に理学・工学の多岐にわたる分野の研究者がおり、専門が違って分けて話せる雰囲気がある。これにより、異分野の考え方を吸収し、自分の研究にフィードバックをかけることができる。」とのことでした。ご専門は「建築物の耐震構造」

で、建築物の耐震性能評価手法および耐震補強手法の研究をされています。耐震構造は日本が世界をリードする分野だそうなので、日本だけでなく世界中の建築物を対象に耐震構造の技術を外国政府と協力しながら広めておられるそうです。これまでは、大規模な地震が起これば、すぐさま世界中の地震現場へ調査に行かれてきたそうですが、「副所長になったので、これからは自ら現場に行く機会が減るでしょうね」と少し残念そうなお様子でした。これからの副所長としてのご活躍が楽しみです。

(高宮 真)

シリーズ 生研の還暦によせて

団塊世代の私は、生研と同じ時期に誕生しました。生研にお世話になり、一緒に還暦を迎えたことに特別な思いを感じています。

私が、生研の技術職員になったのは1969年でした。六本木7丁目に、麻布竜土町という旧地名の名残が色濃く残っていた頃で、六本木通りにも、裏の青山墓地の通りにも路面電車が走っていました。私は、当初から生研の雰囲気の良さが気に入り、駒場Ⅱに移転する1999年までの30年を六本木の生研で過ごし、さらに、駒場Ⅱに移転してから10年になりました。この間、私は、井口昌平教授、虫明功臣教授、沖 大幹教授の三人の先生方にお世話になり、先生方の自由な研究姿勢の下で、他の部局の技術職員とは異なった「良い雰囲気」を享受してきました。

私は、主にフィールドワークの観測・

調査・試験・計測に従事し、仕事のテーマは、①河川模型実験、②房総地域の水文調査、③多摩ニュータウンの水文観測、④雨水浸透の実験、⑤海老川の水文観測、⑥マイクロ波による表層土壌水分計測の実験、⑦安定同位体比測定、と変遷してきました。どのテーマの仕事も楽しく、興味深く進めてきました。試験装置の試作・開発の仕事では、必要な資材を自由に購入することを許されました。多額の経費が伴う実験や調査も自由に行うことができました。また、若い頃は、研究者と同じように研究成果を学会で発表することも度々でした。技術職員が何処よりも多くいて、職員が粹に感じて働ける生研の気風は、「生研の伝統」の一つであると思っています。

この40年間に、研究室から巣立っていった学生は、学部87名、修士課程66名、博士課程31名、その内、外国人留学

生は27名、研究員を加えると13カ国35名になりました。今では、全員が立派な地位に就いて活躍しています。つい最近も、IAHS (International Association of Hydrological Sciences) の2009年度のTison賞を平林由希子 (H16博士課程) さんが受賞したことを聞きました。これは、沖先生・鼎先生に続いて日本で2度目の快挙です。還暦になった私は、彼らの活躍を耳にするのを楽しみに思うようになりました。彼らも、「生研の伝統」を引き継いで、国内・海外のそれぞれの立場で、生研の「良い雰囲気」を拡げているように思います。還暦を迎えた生研もそれを楽しみに見ているかもしれません。

(人間・社会系部門 沖研究室
小池 雅洋)



1993年
研究室の仲間16年前
(スタッフ6名)



2009年 研究室の仲間 (現在)
25回目の千葉の花見
(スタッフ14名)

海中工学研究センターインド事務所の開設

海中工学研究センターは、国際共同研究活動の一環として、2009年2月、WWF インディアとの研究交流協定を更新、さらに共同研究推進に向けて、本センターのインド事務所をデリーにあるWWF インディア本部およびナローラ（ウッタルプラデッシュ州）支局内に開設した。

本センターインド事務所においては、今後、海中工学をベースとしたインドの

希少野生動物の観測を中心とした共同研究を推進する。その一つの柱として、WWF インディアおよびインド工科大学デリー校との国際共同研究プログラム INCASTS (Indo-Nippon Collaboration on Acoustic Surveillance Technology for Susu) を展開する。INCASTS プログラムは、2005年に開始したインドのガンジスカワイルカの観測プログラムをイルカの水中行動の解明を目指した長期観

測へと拡大展開したものである。すでに2008年11月から、ガンジスカワイルカの長期リアルタイム生態音響観測を開始しており、現在もリアルタイムモニタリングは続いている。また、これを基盤に東京大学海洋研究所とともにインドの固有種であるワニの一種「ガリヤール」の調査活動に乗り出す。

(海中工学国際研究センター
特任研究員 杉松 治美)



現地事務所看板



海中工学研究センター
インド事務所（WWF
ナローラ支局内）にて
浦センター長



2009年2月、INCASTSプログラムに
おける現地での装置組み立て作業



2009年2月、海中工学研究センター
インド事務所（WWFナローラ支局内）
の関係者一同

海中工学国際研究センター発足

海中工学研究センターは、2009年4月1日、これまでの基盤に、極地、海底深部地下あるいは閉鎖空間なども対象に含めた海中工学をさらに深化し、一層の国際共同性を図るべく、5年の時限にて海中工学国際研究センターに規模を1.5倍にして生まれ変わった。

その門出を祝する発足記念式典は4月10日(金)に生産技術研究所にて行われた。本センターの研究の人的ネットワークの根幹は、年に2回、20年以上続け

ている海中海底工学フォーラムにある。このため式典は、第43回海中海底工学フォーラムの研究会との合同開催にて執り行われ、200名を超える方々にご参加いただいた。フォーラム研究会後に開始された式典では、米国ワシントン大学の教授で、海底観測ケーブルネットワーク建設の世界的リーダーであるJohn Delaney博士による新しい工学技術が拓く海洋科学の未来についての特別招待講演が行われ、引き続き、「海洋」の

盟友として協力して研究を推進している(独)海洋研究開発機構加藤康宏理事長、東京大学海洋研究所西田睦所長から祝辞を賜った。海洋国家日本の海中技術における基盤を支えることがおおいに期待されている。祝賀会(フォーラム懇親会)は、野城智也生研新所長による乾杯の挨拶に始まり、恒例の「万歳」で成功裡に終了することができた。

(海中工学国際研究センター
特任研究員 杉松 治美)



ワシントン大学教授 John Delaney博士



(独)海洋研究開発機構 加藤康宏理事長



東京大学海洋研究所 西田睦所長



野城所長の挨拶



司会の浅田教授



恒例の万歳

第5回計測技術開発センター公開シンポジウム 「環境計測の来し方行く末」

4月16日(木)コンベンションホールにおいて、第5回計測技術開発センター公開シンポジウム「環境計測の来し方行く末」が開催された。このシンポジウムは、2008年度をもって東京大学生産技術研究所計測技術開発センターが終了したことから、センター終了総括を兼ねて行われ、当センターのメンバーの他、これまでに計測技術開発センターの活動に尽力いただいた諸先生を講演者として迎え、計測技術に関する研究の歴史と展望を紹介した。

生産技術研究所野城智也所長および人間・社会系部門主任の目黒公郎教授の開会の挨拶で始まり、セッション1では「地域環境と地球環境」のテーマの下で、サステナブル材料国際研究センターの渡辺正教授、および物質・環境系部門の追田章義教授からご講演を頂いた。続くセッション2では、「健康と安全」のテーマの下で、第四代計測技術開発センター長の加藤信介教授、および先進モビリティ研究センターの坂本慎一准教授からご講演を頂いた。セッション3では、

「計測新技術」のテーマの下で、物質・環境系部門の火原彰秀准教授、および物質・環境系部門の立間徹教授からご講演を頂き、物質・環境系部門前主任の藤岡洋教授のまとめにより閉会した。

今回のシンポジウムは、環境工学、計測化学、電気化学など異なる分野の研究者の交流に役立つものになると共に、計測技術の歴史を展望することで当センターの終了総括としてふさわしいものとなった。

(人間・社会系部門 樋山 恭助)

講演 一 覧	セッション1「地域環境と地球環境」	「光合成のメカニズム研究と地球環境問題」 「地産地消型バイオ燃料(地燃料)と地域環境問題」	渡辺 正 追田 章義
	セッション2「健康と安全」	「建物内BCテロ対策」 「建築・都市環境騒音における計測とシミュレーション技術」	加藤 信介 坂本 慎一
	セッション3「計測新技術」	「マイクロ化学技術による計測・モニタリングシステム」 「バイオセンサと光触媒の新技術」	火原 彰秀 立間 徹

野城所長の
開会挨拶



シンポジウム終了後の懇談会で挨拶する
早野茂夫名誉教授
(初代 計測技術開発センター長)



シンポジウム終了後の懇談会で挨拶する
村上周一名誉教授
(第二代 計測技術開発センター長)



シンポジウムで講演する渡辺正教授
(第三代 計測技術開発センター長)



加藤信介教授
(第四代 計測技術開発センター長)

平成21年度大学院学生ガイダンス・歓迎懇親会

平成21年度大学院新入学生ガイダンスが、4月23日(木)にAn棟コンベンションホールで開催され、139名の学生が参加した。最初に野城所長より挨拶があり、知識が集積する生産技術研究所という場をいかし、異分野の研究者との交流に積極的になってほしい、というお話があった。続いてハラスメントガイダンスがあり、ハラスメント相談室の新川田相談員、佃相談員のリアルなシミュレーションにより、ハラスメントがどのようなことなのか大変わかりやすく伝えていただいた。その後、駒場学生相談所の利用案内、情報倫理ガイダンス、生研での生活

の諸注意など少々硬い話が続いたあと、SNGの紹介を経て3人の先輩達のキャンパスライフ発表となった。何の打ち合わせもなかったにもかかわらず、大変バランスの取れた発表で、まず人間・社会系部門陳さんよりスライドを使った食堂やスポーツ施設の紹介があり、その後基礎系部門桑原さんより、異分野の研究分野に触れ、切磋琢磨しつつ実りある研究生活を送ってほしいというメッセージが伝えられた。最後に情報・エレクトロニクス系部門山戸さんからは、自分の就職活動の体験から、企業に求められるスキルとして対人マナー、コミュニケーション

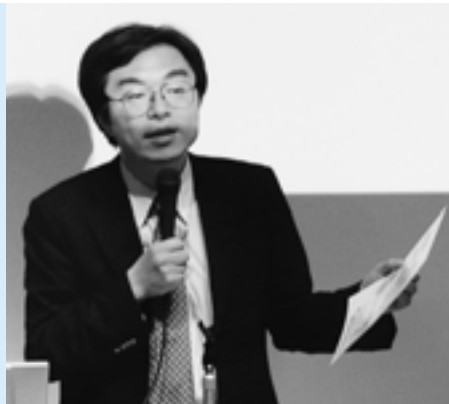
ン能力が重要であり、これは研究生生活を通じて磨くことができるというメッセージが送られた。その後ホワイエにて懇親会が行われ、所長や副所長も含めて学生間の懇親がはかられた。

地下の卓球場の存在など、1年前に生研メンバーに加わったばかりの私は知らないことも多く、勉強になりました。新大学院生の皆さん、2年3年はあつというまでです。生研で研究ができるという貴重なこの機会を大切に、充実した生活をお送りください。

(教育・学務委員 岩船 由美子)



野城所長の挨拶



駒場学生相談所 運営委員長 丹野教授



ハラスメント相談室 新川田相談員(右)、佃相談員(左)



歓迎懇親会



第16回ICUSオープンレクチャー 「都市環境向上への地盤工学の取組み」

2009年4月3日(金)午後、第16回ICUSオープンレクチャーが開催されました。都市基盤安全工学国際研究センター(ICUS)では都市の安全や環境保全について様々な角度から研究を進めていますが、専門家のみならず広く一般の方への情報発信の場として年2回のペースで講演会を開催しています。今回は、「都市環境向上への地盤工学の取組み」というテーマで、3名の講師の方からお話いただきました。まず、東京大学

院工学系研究科社会基盤学専攻の東畑郁生教授が、様々な都市の興盛と衰退のパターンを考察され、過密都市の東京にとっては廃棄物埋立地盤を利用可能なスペースに転換する意義が大きく、都市の持続・発展の鍵であると力説されました。次に首都高速道路公団の土橋浩氏より首都高速中央環状新宿線の建設と環境・安全への配慮についてお話いただき、最後に大成建設株式会社の今村聡氏より二酸化炭素の地下貯留に関する国際的

な技術開発の現況についてご紹介がありました。地面の下で何が起きているか、普段人々の意識には上りにくいですが、講師の方々の巧みな話術とわかりやすいスライドのおかげで、約90名の聴講者は理解を深めることができました。講演会の後は恒例の懇親会でさらに活発な情報交換が行われました。

(都市基盤安全工学国際研究センター
桑野 玲子)



東畑郁生教授 (東京大学)



土橋 浩氏 (首都高速道路公団)



今村 聡氏 (大成建設)

平成20年度冬学期 UROP 研究発表会



3月10日(火)に、An棟の小セミナー室で平成20年度冬学期UROP研究発表会が開催されました。UROP(Undergraduate Research Opportunity Program)は、教養学部1、2年の学生を対象に全学自由研究ゼミナールの一環として生研が開講している、本格的な研究が体験できる研究入門コースです。コーディネー

トは大島まり教授、鈴木高宏准教授が行っています。

今学期は文科系も含めた6名の学生が履修し、全員が10月からの約5ヶ月間にわたる生研での研究成果を発表12分および質疑3分で発表しました。今回の発表会は、夏学期にUROPを履修したOBも参加し、学生同士で白熱した議

論が展開されました。UROPでは、個々のペースにしたがって研究を進めていくため、履修者同士が顔を合わせる機会がほとんどないのですが、発表会後の交流会でも科類・学年を超えた交流が行われました。

生研が六本木から駒場Ⅱリサーチキャンパスへと移転した2001年に、はじまったUROP。同窓会も開催され、今後はUROP履修者同士の交流がさらに深まり、既存のものとは異なる一味違った研究者グループが作られるかもと期待しています。

(知の社会浸透ユニット
特任研究員 和田 重雄
知の社会浸透ユニット
(機械・生体系部門) 大島 まり)

PERSONNEL

■人事異動

生産技術研究所 教員等

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	渡邊 勝彦	定年退職	—	教授 基礎系部門
21. 3.31	藤田 隆史	定年退職	—	教授 機械・生体系部門
21. 3.31	七尾 進	定年退職	—	教授 物質・環境系部門
21. 3.31	新谷 賢	定年退職	—	助手 機械・生体系部門
21. 3.31	前田 正史	退職	理事・副学長	教授 附属サステイナブル材料国際研究センター物質循環工学分野
21. 3.31	村松 伸	辞職	教授 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所	教授 人間・社会系部門
21. 3.31	野島 高彦	辞職	講師 北里大学一般教育部自然科学教育センター科学単位	助教 附属マイクロメカトロニクス国際研究センター
21. 3.31	林 志海	辞職	—	助教 人間・社会系部門

(学内異動(入))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.16	沖 一雄	配置換	講師 人間・社会系部門	講師 大学院農学生命科学研究科
21. 4. 1	岩本 敏	配置換	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	准教授 先端科学技術研究センター

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	半場 藤弘	昇任	教授 基礎系部門	准教授 基礎系部門
21. 4. 1	林 昌奎	昇任	教授 機械・生体系部門	准教授 附属海中工学研究センター
21. 4. 1	根本 利弘	昇任	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	助教 附属戦略情報融合国際研究センター
21. 4. 1	浦 環	雇用更新 配置換	教授 附属海中工学国際研究センター	教授 附属海中工学研究センター海中ロボット学分野
21. 4. 1	北澤 大輔	配置換	准教授 附属海中工学国際研究センター	准教授 機械・生体系部門
21. 4. 1	望月 将志	配置換	助教 附属海中工学国際研究センター	助教 附属海中工学研究センター
21. 4. 1	卷 俊宏	配置換	助教 附属海中工学国際研究センター	助教 附属海中工学研究センター
21. 4. 1	須田 義大	配置換	教授 附属先進モビリティ研究センター	教授 機械・生体系部門
21. 4. 1	中野 公彦	配置換	准教授 附属先進モビリティ研究センター	准教授 機械・生体系部門
21. 4. 1	橋本 秀紀	配置換	准教授 附属先進モビリティ研究センター	准教授 情報・エレクトロニクス系部門
21. 4. 1	影澤 政隆	配置換	助教 附属先進モビリティ研究センター	助教 情報・エレクトロニクス系部門
21. 4. 1	桑原 雅夫	配置換	教授 附属先進モビリティ研究センター	教授 人間・社会系部門
21. 4. 1	坂本 慎一	配置換	准教授 附属先進モビリティ研究センター	准教授 人間・社会系部門
21. 4. 1	火原 彰秀	配置換	准教授 物質・環境系部門	准教授 附属計測技術開発センター
21. 4. 1	坂井 伸行	配置換	助教 物質・環境系部門	助教 附属計測技術開発センター
21. 4. 1	樋山 恭助	配置換	助教 人間・社会系部門	助教 附属計測技術開発センター
21. 5. 1	年吉 洋	昇任	教授 附属マイクロメカトロニクス国際研究センター	准教授 附属マイクロメカトロニクス国際研究センター

(採用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	岩井 将行	採用	助教 情報・エレクトロニクス系部門	プロジェクト准教授 東京電機大学未来科学部

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	伊藤 正彦	採用	助教 情報・エレクトロニクス系部門	博士研究員 北海道大学大学院情報科学研究科
21. 4. 1	熊谷 潤	採用	助教 人間・社会系部門	大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻博士課程
21. 4. 1	谷川 竜一	配置換	助教 人間・社会系部門	技術職員 人間・社会系部門
21. 4. 1	安 台浩	採用	助教 人間・社会系部門	特任助教(短時間)
21. 4. 1	尾上 弘晃	採用	助教 附属マイクロメカトロニクス国際研究センター	特別研究員 日本学術振興会
21. 4. 1	沼田 宗純	採用	助教 附属都市基盤安全工学国際研究センター	コンサルタント 株式会社インクス

(任期付教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	横井 秀俊	配置換	教授 機械・生体系部門プラスチック成形加工学分野	—
21. 4. 1	荒川 泰彦	配置換	教授 情報・エレクトロニクス系部門ナノ光電子デバイス分野	教授 先端科学技術研究センター
21. 4. 1	櫻井 貴康	配置換	教授 情報・エレクトロニクス系部門集積回路システム設計分野	—
21. 4. 1	溝部 裕司	配置換	教授 物質・環境系部門機能性分子学分野	—
21. 4. 1	加藤 信介	配置換	教授 人間・社会系部門快適性学分野	教授 附属計測技術開発センター物理計測分野
21. 4. 1	浅田 昭	配置換	教授 附属海中工学国際研究センター極限環境観測工学分野	—
21. 4. 1	木下 健	任期更新	教授 機械・生体系部門海洋空間利用分野	—
21. 4. 1	石井 勝	任期更新	教授 情報・エレクトロニクス系部門電力エネルギー分野	—
21. 4. 1	荒木 孝二	任期更新	教授 物質・環境系部門有機材料学分野	—
21. 4. 1	藤井 明	任期更新	教授 人間・社会系部門数理形態学分野	—

(所長・附属研究施設長)

発令年月日	氏名	異動内容	新兼務職名・兼務職名	旧兼務職名
21. 4. 1	野城 智也	兼務	所長	—
21. 4. 1	藤田 博之	兼務	副所長	—
21. 4. 1	光田 好孝	兼務	副所長	—
21. 4. 1	中埜 良昭	兼務	副所長	—
21. 4. 1	須田 義大	兼務	附属千葉実験所長	—
21. 4. 1	目黒 公郎	兼務	附属都市基盤安全工学国際研究センター長	—
21. 4. 1	喜連川 優	兼務	附属戦略情報融合国際研究センター長	—
21. 4. 1	森田 一樹	兼務	附属サステイナブル材料国際研究センター長	—
21. 4. 1	浦 環	兼務	附属海中工学国際研究センター長	—
21. 4. 1	桑原 雅夫	兼務	附属先進モビリティ研究センター長	—
21. 4. 1	岡部 徹	兼務	附属サステイナブル材料国際研究センター副センター長	—
21. 4. 1	金子 祥三	兼務	附属エネルギー工学連携研究センター副センター長	—

PERSONNEL

(休職)

発令年月日	氏名	異動内容	新兼務職名・兼務職名	旧兼務職名
21. 3. 8	小田 克郎	休職更新	准教授 物質・環境系部門	—
21. 3.10	西尾 茂文	休職開始	教授 機械・生体系部門	—

(兼任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
21. 4. 1	坂内 正夫	兼任	教授 附属戦略情報融合国際研究センター	大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 理事 国立情報学研究所長
21. 4. 1	村松 伸	兼任	教授 人間・社会系部門	大学共同利用機関法人総合地球環境学研究所研究部教授

(兼務教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
21. 4. 1	大島 まり	兼務	教授 機械・生体系部門	教授 大学院情報学環
21. 4. 1	鈴木 高宏	兼務	准教授 附属先進モビリティ研究センター	准教授 大学院情報学環
21. 4. 1	池内 克史	兼務	教授 附属先進モビリティ研究センター	教授 大学院情報学環
21. 4. 1	堀 洋一	兼務	教授 情報・エレクトロニクス系部門	教授 大学院新領域創成科学研究科
21. 4. 1	瀬崎 薫	兼務	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	准教授 空間情報科学研究センター
21. 4. 1	高宮 真	兼務	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	准教授 大規模集積システム設計教育研究センター
21. 4. 1	佐藤 洋一	兼務	准教授 附属戦略情報融合国際研究センター	准教授 大学院情報学環
21. 4. 1	前田 正史	兼務	教授 附属サステナブル材料国際研究センター	理事・副学長
21. 4. 1	尾張 真則	兼務	教授 物質・環境系部門	教授 環境安全研究センター
21. 4. 1	安達 毅	兼務	准教授 物質・環境系部門	准教授 環境安全研究センター
21. 4. 1	柴崎 亮介	兼務	教授 人間・社会系部門	教授 空間情報科学研究センター
21. 4. 1	大原 美保	兼務	准教授 附属都市基盤安全工学国際研究センター	准教授 大学院情報学環
21. 4. 1	山地 憲治	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	佐藤 光三	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	堂免 一成	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	田中 知	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	鹿園 直毅	兼務	准教授 附属エネルギー工学連携研究センター	准教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	菊池 隆司	兼務	准教授 附属エネルギー工学連携研究センター	准教授 大学院工学系研究科

(客員部門)

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	旧職名・旧所属
21. 4. 1	CHUNG, Edward	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属先進モビリティ研究センター	—
21. 4. 1	高田 章	委嘱	講師(客員教授) 高次協調モデリング部門	—
21. 4. 1	許 正憲	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属海中工学国際研究センター	—
21. 4. 1	高川 真一	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属海中工学国際研究センター	—
21. 4. 1	小高 俊彦	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属戦略情報融合国際研究センター	—

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	旧職名・旧所属
21. 4. 1	横田 弘	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属都市基盤安全工学国際研究センター	—
21. 4. 1	澤田 賢治	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属サステナブル材料国際研究センター	—
21. 4. 1	富山 哲男	委嘱称号付与	講師(客員教授) 人間・社会系部門	—
21. 4. 1	田中 敏久	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属先進モビリティ研究センター	—
21. 4. 1	塚本 修	委嘱	教授 附属先進モビリティ研究センター	(本務:経済産業省関東経済産業局長)
21. 4. 1	藤田 明博	委嘱	教授 附属先進モビリティ研究センター	(本務:内閣府政策統括官(科学技術政策・イノベーション担当))
21. 4. 1	丸山 康樹	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属エネルギー工学連携研究センター	—
21. 4. 1	中村 崇	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属サステナブル材料国際研究センター	—
21. 4. 1	大和田秀二	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属サステナブル材料国際研究センター	—
21. 4. 1	山口 勉功	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属サステナブル材料国際研究センター	—
21. 4. 1	柴山 敦	委嘱称号付与	講師(客員准教授) 附属サステナブル材料国際研究センター	—
21. 5. 1	市橋 康吉	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属都市基盤安全工学国際研究センター	—

(寄付研究部門)

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	本務職名・所属
21. 4. 1	黒田 和男	兼務	特任教授 ニコン光工学寄付研究部門	教授 基礎系部門
21. 4. 1	志村 努	兼務	特任教授 カラー・サイエンス寄付研究部門(ソニー)	教授 基礎系部門
21. 4. 1	須田 義大	兼務	特任教授 モビリティ・フィールドサイエンス(タカラトミー) 寄付研究部門	教授 機械・生体系部門

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	濱田 玲子	任期満了	—	特任助教
21. 3.31	安田 幸司	任期満了	技術系職員 株式会社大阪チタニウムテクノロジーズ	特任助教
21. 3.31	陳 天恩	任期満了	研究員 株式会社パスコ	特任助教(短時間)
21. 4. 1	韓 軍	採用	特任准教授	特任助教(短時間)
21. 4. 1	前田 文孝	採用	特任助教	設計員 株式会社日立製作所指揮管制システム設計部
21. 4. 1	滝口 清昭	採用	特任准教授	客員准教授 東京農工大学大学院工学部
21. 4. 1	木下 晴之	採用(プロジェクト変更)	特任助教	特任研究員
21. 4. 1	木村 啓志	任命	特任助教	特任研究員
21. 4. 1	三澤 宣雄	採用	特任助教	特任助教 IRT研究機構
21. 4. 1	角田 哲也	採用	特任助教	大学院学際情報学府学際情報学専攻博士課程
21. 4. 1	赤川 賢吾	採用	特任助教	大学院工学系研究科化学生命工学博士課程

PERSONNEL

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	守谷 頼	採用	特任助教 (短時間)	Research Staff Member IBM Research Division
21. 4. 1	横尾 善之	兼務	特任准教授 人間・社会系部門	特任准教授 総括プロジェクト機構 寄付研究部門「水の知」(サントリー) 総括寄付講座
21. 4.30	石田 一樹	辞職	シラキユース大学 リサーチアソシエイト	特任助教 (短時間)
21. 5. 1	信太 洋行	任命	特任助教	特任研究員
21. 5. 1	小林 美加	任命	特任助教 (短時間)	特任研究員 (短時間)

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	能勢 義昭	任期満了	特任研究員 (短時間)	特任研究員
21. 3.31	PEREIRA RODRIGUES NAZARE	任期満了	研究開発技術者 CAIRPOL	特任研究員
21. 3.31	大澤 未帆	任期満了	特任研究員 大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター	特任研究員
21. 3.31	NAVARAT-NARAJAH SATHIPARAN	任期満了	外国人特別研究員 日本学術振興会	特任研究員
21. 3.31	孫 福宝	任期満了	研究員 オーストラリア国立大学	特任研究員
21. 3.31	WORAKAN-CHANA KAWIN	任期満了	Researcher Asian Institute of Technology	特任研究員
21. 4. 1	阿部 敏彦	任命	特任研究員	株式会社エイ・エス・アイ総研 研究開発グループ (休職)
21. 4. 1	沖山 佳生	採用	特任研究員	研究員 独立行政法人科学技術振興機構
21. 4. 1	小野 裕己	採用	特任研究員	特任教員 千葉大学先進科学センター
21. 4. 1	山口 智美	採用	特任研究員	ソリューション・エンジニア 日本SGI株式会社 ビジューライゼーション事業本部
21. 4. 1	西村 康幸	採用 (プロジェクト変更)	特任研究員	特任研究員
21. 4. 1	瀧ノ上正浩	採用	特任研究員	研究員 京都大学大学院理学研究科
21. 4. 1	桐谷 乃輔	採用	特任研究員	特別研究員 日本学術振興会 (京都大学大学院工学研究科)
21. 4. 1	佐藤 啓宏	採用	特任研究員	技師補 株式会社フライングモール開発センター
21. 4. 1	北川 隆	採用	特任研究員	研究員 産業技術総合研究所情報セキュリティ研究センター
21. 4.16	TOMA MILAN	採用	特任研究員	experienced Marie Curie researcher European Commission, Altair Development France
21. 4.16	楊 征路	採用	特任研究員	-
21. 5. 1	AZIZ MUHAMMAD	採用	特任研究員	機械技術・設計者 セイコーエプソン株式会社
21. 5. 1	MEHRAN BABAK	採用	特任研究員	特任研究員 (短時間)

(学術支援専門職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	皆川 廣司	任期満了	学術支援専門職員 (短時間)	学術支援専門職員
21. 4. 1	小貫真委子	採用	学術支援専門職員	技術補佐員 (派遣職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	佐藤美智代	採用	学術支援専門職員	学術支援専門職員 大学院理学系研究科
21. 4. 1	平川 学	採用	学術支援専門職員	技術補佐員
21. 4. 1	小笠原早苗	採用	学術支援専門職員	技術員 独立行政法人科学技術振興機構

(学術支援職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	窪田衣里子	任期満了	一般職員	学術支援職員
21. 4. 1	近藤理沙子	採用	学術支援職員	事務アシスタント 野村證券株式会社金融経済研究所アジア調査部

技術系

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	高山 俊雄	定年退職	-	技術専門職員 物質・環境系部門
21. 3.31	小池 雅洋	定年退職	-	技術専門職員 人間・社会系部門
21. 3.31	星野 富夫	定年退職	-	技術専門職員 人間・社会系部門
21. 3.31	米良 忠久	定年退職	-	技術専門職員 試作工場
21. 3.31	福尾 哲二	定年退職	-	技術専門職員 試作工場
21. 3.31	倉科満壽夫	定年退職	-	技術専門職員 映像技術室
21. 3.31	鈴木 常夫	定年退職	-	技術専門職員 電子計算機室
21. 3.31	稲垣 賢一	辞職	-	技術専門職員 情報・エレクトロニクス系部門

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	高橋 岳生	配置換	技術専門職員 人間・社会系部門	技術専門職員 附属計測技術開発センター

(再雇用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	鳥光 道枝	再雇用 任期満了	-	再雇用教職員 人間・社会系部門
21. 3.31	松崎 幹康	再雇用 任期満了	-	再雇用教職員 試作工場
21. 3.31	中村 英俊	再雇用 任期満了	-	再雇用教職員 映像技術室
21. 3.31	石川 利明	再雇用 任期満了	-	再雇用教職員 附属千葉実験所
21. 4. 1	小池 雅洋	再雇用	再雇用教職員 人間・社会系部門	-
21. 4. 1	星野 富夫	再雇用	再雇用教職員 人間・社会系部門	-
21. 4. 1	米良 忠久	再雇用	再雇用教職員 試作工場	-
21. 4. 1	福尾 哲二	再雇用	再雇用教職員 試作工場	-
21. 4. 1	倉科満壽夫	再雇用	再雇用教職員 映像技術室	-
21. 4. 1	鈴木 常夫	再雇用	再雇用教職員 電子計算機室	-
21. 4. 1	高山 俊雄	再雇用	再雇用教職員 物質・環境系部門	-
21. 4. 1	岡田 和三	再雇用 任期更新	再雇用教職員 機械・生体系部門	-
21. 4. 1	小西 義幸	再雇用 任期更新	再雇用教職員 試作工場	-
21. 4. 1	鶴 達郎	再雇用 任期更新	再雇用教職員 物質・環境系部門	-

PERSONNEL

事務系

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	依田 晴樹	定年退職	—	副所長 事務部長
21. 3.31	鈴木 照夫	定年退職	—	総務課専門員 (施設チーム)
21. 3.31	宮澤 光明	定年退職	—	総務課専門員 (施設チーム)
21. 3.31	川合勇美子	定年退職	再雇用教職員 理学系研究科附属臨海実験所事務室	経理課係長 (予算執行チーム)
21. 3.31	三井 伸子	定年退職	—	総務課主任 (総務・広報チーム)
21. 3.31	小俣亜香音	任期満了退職	—	総務課一般職員 (人事・厚生チーム)

(学内異動 (出))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	加藤 淳	配置換	副課長 本部総務・法務系広報グループ広報企画チーム	副課長 総務課 (総務・広報チームリーダー)
21. 4. 1	木下 誠一	配置換	本部財務系外部資金戦略グループ科学研究費補助金チーム係長	経理課係長 (連携研究支援室企画チームリーダー)

(出向)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	三浦 藤明	在籍出向	九州工業大学学務部入試課入試企画係長	総務課係長 (総務・広報チーム)

(学内異動 (入))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	佐沼 繁治	昇任	事務部長	事務長 東洋文化研究所
21. 4. 1	高橋 博行	配置換	副課長 総務課 (総務・広報チームリーダー)	副事務長 理学系研究科等
21. 4. 1	久下谷清美	配置換	総務課副課長 (研究環境調整室長)	教養学部等経理課副課長

(採用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	野崎 勝利	採用	総務課専門員 (研究環境調整室施設チーム)	弘前大学施設環境部本町地区施設室室長補佐
21. 4. 1	尾田 健多	採用	総務課一般職員 (総務・広報チーム) リサーチ・マネジメント・オフィス兼務	—

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	渡辺 恵理	昇任	総務課主任 (国際交流チーム)	総務課一般職員 (国際交流チーム)
21. 4. 1	岡野 孝之	昇任	経理課係長 (連携研究支援室企画チームリーダー)	経理課主任 (連携研究支援室企画チーム)

(再雇用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	野口 宏	再雇用 任期満了	—	再雇用教職員 附属千葉実験所事務室
21. 4. 1	三井 伸子	再雇用	再雇用教職員 総務課 総務・広報チーム	—
21. 4. 1	鈴木 照夫	再雇用	再雇用教職員 総務課 研究環境調整室施設チーム	—
21. 4. 1	三浦 孝樹	再雇用	再雇用教職員 経理課 連携研究支援室企画チーム	専門員 (研究協力係長) 情報学環
21. 4. 1	二宮 一郎	任期更新	再雇用教職員 総務課 図書チーム	—
21. 4. 1	小出 幸夫	任期更新	再雇用教職員 附属千葉実験所事務室	—

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	高橋 浩幸	休職期間満了復帰	副課長 総務課	副課長 (研究環境調整室長) 総務課

(育児休業)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	石坂理恵子	育児休業期間満了復帰	総務課主任 (人事・厚生チーム)	—

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構 教員等

(兼務教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
21. 4. 1	荒川 泰彦	兼務	教授	教授 生産技術研究所
21. 4. 1	今井 浩	兼務	教授	教授 大学院情報理工学研究科
21. 4. 1	大津 元一	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	勝本 信吾	兼務	教授	教授 物性研究所
21. 4. 1	菊池 和朗	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	五神 真	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	染谷 隆夫	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	田中 雅明	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	樽茶 清悟	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	平川 一彦	兼務	教授	教授 生産技術研究所
21. 4. 1	平本 俊郎	兼務	教授	教授 生産技術研究所
21. 4. 1	古澤 明	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
21. 4. 1	山内 薫	兼務	教授	教授 大学院理学系研究科
21. 4. 1	高橋 琢二	兼務	准教授	准教授 生産技術研究所
21. 4. 1	町田 友樹	兼務	准教授	准教授 生産技術研究所
21. 4. 1	村尾 美緒	兼務	准教授	准教授 大学院理学系研究科
21. 4. 1	岩本 敏	兼務	准教授	准教授 生産技術研究所
21. 4. 1	中岡 俊裕	兼務	特任准教授	特任准教授 生産技術研究所

(客員部門)

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	本務職名・所属
21. 4. 1	野田 進	委嘱	教授	教授 京都大学工学研究科
21. 4. 1	曾根 純一	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
21. 4. 1	高橋 明	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
21. 4. 1	横山 直樹	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
21. 4. 1	竹内 繁樹	委嘱	教授	教授 北海道大学電子科学研究所
21. 4. 1	山本 喜久	委嘱	教授	教授 情報・システム研究機構国立情報学研究所
21. 4. 1	石田 寛人	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
21. 4. 1	武田 晴夫	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
21. 4. 1	菅原 充	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	白杵 達哉	任命(免)	富士通研究所	特任教授
21. 3.31	小寺 哲夫	任期満了	助教 東京工業大学	特任助教
21. 4. 1	井原 章之	採用	特任助教	特任助教 (短時間) 生産技術研究所

PERSONNEL

地球観測データ統合連携研究機構 教員等

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	角谷 拓	任期満了	独立行政法人国立環境研究所	特任助教
21. 4. 1	辻本久美子	採用	特任助教	大学院工学系研究科社会基盤学専攻博士課程
21. 4. 1	賀 斌	採用	特任助教	外国人特別研究員 日本学術振興会
21. 4. 1	松崎慎一郎	採用	特任助教	大学院農学生命科学研究科生圏システム学専攻博士課程
21. 4. 1	李 亮源	採用	特任助教	特任研究員 空間情報科学研究センター

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	BOUSSETTA SOUHAIL	任期満了	コンサルタント ヨーロッパ中期気象予報センター	特任研究員

(学術支援専門職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	藤田 智子	採用	学術支援専門職員	技術補佐員
21. 5. 1	佐藤 學	採用	学術支援専門職員	—

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 4. 1	竹本 一矢	任命	特任准教授	研究員 株式会社富士通研究所ナノテクノロジー研究センター(休職)
21. 4. 1	TANDAECCHANURAT ANIWAT	採用	特任助教	大学院工学系研究科電子工学専攻博士課程

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
21. 3.31	江部 広治	任命(免)	主管研究員 富士通研究所	特任研究員
21. 4. 1	高津 求	任命	特任研究員	主任研究員 株式会社富士通研究所ナノテクノロジー研究センター(休職)

昇任のご挨拶

基礎系部門 教授

半場 藤弘



4月1日付けで基礎系部門の教授に昇任いたしました。流体物理学、特に乱流の物理とモデリングを研究しております。乱流は機械、建築、宇宙、気象などさまざまな分野に見られる流体現象ですが、その普遍的な性質や機構を解明し、乱流シミュレーションの土台となるモデルを開発することをめざしています。生研という場で研究ができることに感謝しつつ、今後もいっそう気を引きしめて研究にとりこんでいきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

機械・生体系部門 教授

林 昌奎



4月1日付けで機械・生体系部門の教授に昇任いたしました。海洋、特に海面における流体力学現象の解明、観測および推定方法に関連する研究開発を行っています。研究の柱として進めているマイクロ波レーダによる波浪観測手法の開発においては、先輩たちの暖かいご支援のお陰で、実用性の高い波浪観測用レーダシステムが完成し、現在実海域配置を進めているところです。今後も様々な活動を通して生研の更なる発展に貢献できればと願っております。何卒よろしくお願い申し上げます。

附属マイクロメカトロニクス国際
研究センター 教授

年吉 洋



5月1日付けで教授に昇任致しました。これまで、マイクロメカトロニクス(MEMS)の基礎研究と、光通信デバイスや画像ディスプレイ等の微小光学応用を産業界と共同で進めてきました。また最近では、印刷技術で作る大面積MEMSや、無線通信応用にも手を広げております。MEMS分野は電気、機械、化学、光学、インフラなど、さまざまな領域が接する位置にありますので、工学の総合研究所である生産技術研究所の皆様を支えられて研究できることを、大変ありがたく感じております。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

情報・エレクトロニクス系部門
准教授

根本 利弘



4月1日付けで准教授に昇任いたしました。専門は地球観測データを対象とした大規模データアーカイブシステムで、これまで喜連川研究室において、多種多様で膨大な地球観測データを統合し、解析するシステムの構築を進めてまいりました。地球環境問題への関心がますます高まる中、社会へ有益な情報を提供できるシステムを目指し、今後より一層努力していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

PERSONNEL

附属海中工学国際研究センター
特任准教授

韓 軍



4月1日付けで海中工学国際研究センターの特任准教授に昇任させていただきました。

これまで生産技術研究所浅田研究室において、水産音響、海底地殻変動ロボット観測システムにおける水中通信などの技術開発に取り組んできました。今後は海中情報応用計測学分野において水産音響技術の高度化、海中音響通信や音響計測技術を開発していきたいと考えております。今後とも一層のご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

附属エネルギー工学連携研究センター
客員教授

丸山 康樹



1970年の東大入学時は東大紛争直後、卒業時は第1次石油ショック。電力中央研究所では、環境アセス関連問題を研究し、波浪シミュレーションで10年後に東大から学位を授与。米国と共同研究を開始し、世界最高速の地球シミュレータを用いた温暖化予測を実施。最近、経済・エネルギー・環境のトリレンマ問題が現実化・深刻化していると感じます。東大の先生や学生の皆さんと叡智を出し合って、解決策を見出していきたいと思っております。

附属サステイナブル材料国際研究センター
客員教授

中村 崇



今年の4月よりサステイナブル材料国際研究センターの客員教授に委嘱されました。専門は、化学熱力学を基礎とした素材のリサイクルです。リサイクルの対象は、必ずしも金属素材だけではなく、プラスチックも対象にしています。最近では、廃小型電子機器のリサイクルシステムの確立を目指しています。生研においても社会に貢献できる研究活動をしたと考えています。

附属サステイナブル材料国際研究センター
客員教授

大和田秀二



各種成分分離技術を廃棄物に適用することにより資源の有効利用と有害成分の無害化を促進し、循環型社会構築に貢献することを目指しています。この目的達成のためには、成分分離段階においても省資源・エネルギー的なプロセスの開発が重要であり、現在、ともすれば非効率のままに行われている廃棄物処理を高度化するために、破碎・粉砕および固固・固液分離現象の理論化・モデル化と、技術改良・新技術開発を行ってゆきます。

附属サステイナブル材料国際研究センター
客員教授

山口 勉功



4月1日付けでサステイナブル材料国際研究センターの客員教授に着任しました。非鉄金属製錬が抱える課題の解決を目指し、非鉄製錬企業と共同で研究をしております。近年の鉱石品位の低下や不純物の増加、また人工的で複雑、多様化した廃棄物の処理に伴い、非鉄製錬には従来の鉱石を処理していたとは異なる課題があります。センターの一員として持続可能社会の確立に貢献できるよう努める所存です。何卒ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

附属サステイナブル材料国際研究センター
客員准教授

柴山 敦



4月1日付けでサステイナブル材料国際研究センターの客員准教授に着任いたしました。専門は資源工学分野で主に資源の有効利用とリサイクルを目的とした資源処理技術の開発について研究を行っています。世界には開発が期待される未利用資源が多く存在し、不純物を高含有する鉱石や鉱業廃棄物の再利用、あるいは分離選別技術を利用した金属リサイクルの研究を進めています。皆さまのご指導のもと研究教育を展開していきますので今後ともよろしくお願い申し上げます。

PERSONNEL

モビリティ・フィールドサイエンス
(タカラトミー) 寄付研究部門
特任准教授
滝口 清昭



4月1日付けでモビリティフィールドサイエンス寄付研究部門の特任准教授に着任いたしました。以前はソニーで準静電界の研究をしていました。

業績、環境ともに優れた生研という素晴らしい場で、モビリティの分野で新しいセンシングやデバイスの開発に挑戦したいと思っています。

何卒、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

人間・社会系部門 講師
沖 一雄



3月16日付けで人間・社会系部門の講師に着任致しました。これまでは東京大学大学院農学生命科学研究科で、農業・環境評価のためのリモートセンシング技術手法の開発に従事しておりました。今後は、その研究を発展させ、広域生態環境計測研究の新たな分野を開拓してまいりたいと思っております。特に、水・土・食料生産に焦点をあてた環境保全型流域圏の構築を衛星観測を通して実現したいと考えております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

事務部長
佐沼 繁治



4月1日付けで東洋文化研究所から着任いたしました。

このキャンパスは、宇宙科学研究所勤務時代と施設部勤務時代合わせて6年間、何らかの関わりがあり、懐かしさと身が引き締まる思いとでいっぱいです。

何よりも早く研究所事務の全貌を把握できるよう努力していくとともに、事務部のなかに於いては、月並みではありますが、それぞれの与えられた業務について報告・連絡・相談を徹底するよう啓蒙し、研究・教育に支障をきたさないための仕事を事務職員全員でタッグを組んで参りたいと考えております。

野城所長先生をはじめ皆様のご指導の程、よろしくお願いいたします。

採用



●情報・エレクトロニクス系部門
瀬崎研究室 助教
岩井 将行



●情報・エレクトロニクス系部門
豊田研究室 助教
伊藤 正彦



●人間・社会系部門
柴崎研究室 助教
熊谷 潤



●人間・社会系部門
岸研究室 助教
安 台浩



●附属マイクロメカトロニクス国際研究センター
竹内研究室 助教
尾上 弘晃



●附属都市基盤安全工学国際研究センター
目黒研究室 助教
沼田 宗純



●総務課専門員
(研究環境調整室施設チーム)
野崎 勝利



●総務課一般職員
(総務・広報チーム)
リサーチ・マネジメント・
オフィス兼務
尾田 健多

配置換



●人間・社会系部門
村松研究室 助教
谷川 竜一



●総務課副課長
(総務・広報チームリーダー)
高橋 博行



●総務課副課長
(研究環境調整室長)
久下谷清美



研究における資本主義

マイクロメカトロニクス国際研究センター
藤田(博)研究室 石田 忠



私は2009年1月より、アメリカのロサンゼルスにあるUCLAで、今までの研究から離れて物性の研究をしています。UCLAではSuneel Kodambaka助教のお世話になっています(以下、普段通りSuneelと呼びます)。Suneelは30代前半のインド人で、Nature 2本、Science 2本を通しての優秀な研究者です。SuneelはUCLAのテニュアトラックであるため、UCLAが投資した金額以上の成果を定められた期間内に挙げる必要があります。それができないときはテニュアにはなれず、容赦なく首を切られるらしいです。そんなSuneelですが、今のところ研究室の立ち上げに苦戦しています。問題はお金と人です。アメリカで大きな予算の割合を占める防衛関係の研究費を得ることは大変困難とされています。また、学生3人ポストドク1人の状況で、やりたいことは沢山あるのに明らかに人が足りません。このような状況でも、投資以上の成果をあげて大学に貢献できる人材かが問われる資本主義を体感しています。

私はそんな研究室で半年間研究するチャンスを得ました。私とSuneelは2008年3月にUCLAで発表したときに同じセッションで発表して出会いました。これをきっかけにして、互いに互いの研究に興味を持ち、交渉の末、半年間の在籍を認めてもらいました。半年という新しい研究や現地に慣れるだけで時間が過ぎてしまいます。しかし、若い活力があり優秀なSuneelの研究室で結果を出し、それを論文にまとめることを半年間で達成したいと思っています。Suneelは研究に必要な資金を投資してくれています。だから、Suneelの私への投資に対して、それ以上の成果を返そうと思っています。このような環境で、資本主義的な研究の進め方について学ぶことができ、今後にとって良い経験になっています。

VISITS

外国人客員研究員

氏名	国籍・所属	研究期間	受入研究室
Song, Doosam	大韓民国・成均館大学 助教授	2009. 4. 1～2010. 3.31	人間・社会系部門 加藤(信)研究室
Padhy, Prabin Kumar	インド・インド情報技術工科大学 助教授	2009. 5.15～2010. 1.15	情報・エレクトロニクス系部門 橋本研究室
KASSEM, Mohamed	エジプト・アシュート大学 教授	2009. 6.15～2009. 9.21	人間・社会系部門 加藤(信)研究室

外国人協力研究員

氏名	国籍・所属	研究期間	受入研究室
LEE, Ju-Kyung	大韓民国・韓国産業技術大学 博士課程	2009. 4. 1～2010. 3.31	マイクロメカトロニクス国際研究センター 金研究室
HUANG, Lei Ti	台湾・Chung Yuan Christian University Ph.D.	2009. 4.20～2011. 4.19	機械・生体系部門 横井研究室

博士研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
WANG, Bing	中華人民共和国	2009. 4. 1～2010. 3.31	情報・エレクトロニクス系部門 合原研究室
PERERA, Manoj Vincent	スリランカ	2009. 4. 1～2010. 3.31	情報・エレクトロニクス系部門 池内研究室

準博士研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
JALILI, Javad	イラン	2009. 3.18～2010. 3.17	人間・社会系部門 古関研究室
河村 健一	日本	2009. 4. 1～2010. 3.31	マイクロメカトロニクス国際研 究センター 河野研究室
濱田 崇	日本	2009. 4. 1～2010. 3.31	物質・環境系部門 工藤研究室

東京大学特別研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
PIGOT, Christian	フランス	2009. 4. 1～2010. 2.28	物質・環境系部門 火原研究室
NAVARATNARAJAH, Sathiparan	スリランカ	2009. 4. 1～2011. 3.31	基礎系部門 中埜研究室
MONTAGNE, Kevin Paul	フランス	2009. 4. 1～2011. 3.31	バイオナノ融合プロセス連携研 究センター 酒井(康)研究室
根岸 みどり	日本	2009. 4. 1～2011. 3.31	マイクロメカトロニクス国際研 究センター 竹内(昌)研究室
PIERCONTI, Jong Kuk Mauro	イタリア	2009. 5. 1～2011. 4.30	人間・社会系部門 藤森研究室

外国人研究者講演会

<p>3月24日(火) 司会：教授 志村 努</p> <p>Dr. Seung Ran LEE 博士研究員、Seoul National University, Korea INVESTIGATION ON BIPOLAR RESISTIVE SWITCHING MECHANISM OF EPITAXIALLY GROWN NiO THIN FILMS</p>	<p>4月10日(金) 司会：教授 浦 環</p> <p>Prof. John DELANEY University of Washington, USA THE FUTURE OF OCEAN SCIENCE : INTERACTIVE, ROBOTIC (FIXED AND MOBILE) SENSOR NETWORKS, HARD-WIRED TO NEXT-GENERATION INTERNET</p>
<p>4月6日(月) 司会：教授 黒田 和男</p> <p>Prof. Irina Livshits St. Petersburg State University, Russia RECENT ACHIEVEMENTS IN OPTICAL DESIGN IN ITMO AND THEIR APPLICATIONS INTO RESEARCH AND INDUSTRY</p>	<p>4月22日(水) 司会：准教授 大岡 龍三</p> <p>Prof. Michael A. Humphreys Oxford Brookes University United Kingdom PRINCIPLES OF ADAPTIVE THERMAL COMFORT</p>
<p>4月6日(月) 司会：教授 黒田 和男</p> <p>Prof. Paul Urbach Delft University of Technology, Netherlands VECTORIAL DIFFRACTION THEORY APPLIED TO OPTIMIZED FOCUSED FIELDS AND PHOTOACTIVE MEDIA</p>	<p>4月24日(金) 司会：教授 桑原 雅夫</p> <p>Prof. Chan Wirashinghe The University of Calgary, Canada MODELING OF PUBLIC TRANSPORT SYSTEMS; INSIGHTS AND ISSUES RELATED TO NEWELL'S APPROACH</p>
<p>4月6日(月) 司会：教授 大島 まり</p> <p>Dr. X. Yun Xu Associate Professor, Imperial College London, United Kingdom MODELLING OF FLOW AND MASS TRANSPORT IN BIOLOGICAL SYSTEMS</p>	<p>5月14日(木) 司会：教授 田中 肇</p> <p>Dr. Harald Pleiner Project Leaders, Max Planck Institute for Polymer Research, Germany INFLUENCE OF SEDIMENTATION ON CONVECTIVE INSTABILITIES IN COLLOIDAL SUSPENSIONS</p>
<p>4月6日(月) 司会：教授 大島 まり</p> <p>Prof. Nigel Wood Imperial College London, United Kingdom LAMINAR-TURBULENT TRANSITION IN THE CIRCULATION AND ITS EFFECT ON FRICTIONAL STRESSES</p>	

AWARDS

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
人間・社会系部門 (財)鉄道総合技術研究所	教授 古関 潤一 協力研究員 中島 進 館山 勝 渡邊 健治	2008 Excellent Paper Award (2008年優秀論文賞) Taiwan Geotechnical Society (台湾地盤工学会)	Study on Resistant Mechanism of Aseismic Countermeasure for Geosynthetic-Reinforced Wall and Leaning Type Retaining Wall	2009. 3.14
人間・社会系部門	准教授 坂本 慎一 元大学院生 長友 宏 元大学院生 牛山 歩 名誉教授 橘 秀樹	日本音響学会佐藤論文賞 (社)日本音響学会	Calculation of impulse responses and acoustic parameters in a hall by the finite-difference time-domain method	2009. 3.18
計測技術開発センター	助教 樋山 恭助	2008年度関東支部若手優秀研究報告賞 (社)日本建築学会関東支部	CFD解析による熱流応答の算出と動的熱負荷計算への組み込み	2009. 3.25

■学生部門

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
マイクロメカトロニクス国際研究センター 年吉研究室	博士研究員 高橋 一浩	研究奨励賞 (社)応用物理学会集積化MEMS技術研究会運営委員会	SOI CMOS-MEMSにおけるMEMSポストプロセスの信頼性評価	2008.11.21
基礎系部門 黒田研究室	大学院学生 遠矢 祥弘	ASSP Student Presentation Award Optical Society of America	Generation of Mid-Infrared Ultrashort Pulses in DAST	2009. 2. 4
都市基盤安全工学 国際研究センター 加藤(佳)研究室	研究実習生 平田 渉	第36回関東支部技術研究発表会優秀発表者(第V部門) (社)土木学会	繊維補強モルタルへの廃棄物とリサイクル材料の活用	2009. 5.20

INFORMATION

第5回東京大学駒場キャンパス 技術発表会発表者募集について

第5回東京大学駒場キャンパス技術発表会の発表者を募集いたします。

技術職員が日常業務で携わっている実験装置の開発、維持管理から改善、改良の話題に及ぶ広範囲な技術的研究支援活動から得られた成果のみならず、研究・開発しようと思った動機や研究・開発途中におけるつまずき等をどのように乗り越えてきたか、あるいは失敗についても参加者全員で討論できるような技術にかかわる内容などを募集いたします。

第5回東京大学駒場キャンパス技術発表会実行委員会

また個別研修や全学研修の報告、定年を迎える方が技術職員に伝えたいことや技術職員としての集大成、また若手技術職員が5年毎の仕事内容の見直し報告、あるいは再雇用熟練技術職員が今まで身につけた技術の公開等、職務上の技術問題に限定せず、技術職員等の能力向上に役立つものであれば、どのような分野でも歓迎いたします。

みなさまの積極的な応募をお待ちしております。ご応募は下記実行委員へお願いいたします。

募 集 要 項

開催日：2009年10月21日(水)

場 所：駒場Ⅱリサーチキャンパス コンベンションホール (An棟 2階)

応募資格：技術職員、教務系技術職員、助手、助教、事務職員等

発表形式：口頭発表(20～30分)、誌上発表、ポスター発表

応募〆切：2009年7月17日(金)

応募先：(第1部)片倉 智：内線56111 / (第2部)大石 正道：内線57466
(第3部)高橋 巧也：内線56277 / (第4部)黒岩 善徳：内線56332
(第5部)大矢 俊治：内線56403 / (試作工場)谷田貝悦男：内線58710
(流体テクノ)金子 和行：内線56639
(教養学部)菅沼 諭：内線46128

実行委員長 大塚日出夫 tel 03-5452-6842 hideo@iis.u-tokyo.ac.jp

INFORMATION

■還暦を迎えた生研……貴方の生研への思いをぜひ誌面へ！

生研ニュースでは、読者の皆様ならどなたにでも参加していただける読物コーナーをいつでもご用意しています。

- 短期の海外研修や留学・共同研究などで海外に行かれた方
- 日常の生研生活などを通じて気づいたちょっとしたこと、素敵だと思ったこと
- もちろん自分の研究活動

などについて書いていただくものです。「これは！」と思ったら、気軽にお近くの生研ニュース部会員までお届け下さい。

他にも、所内で行われる行事の告知、各組織の活動の紹介や時々のホットな話題など、生研ニュース部会員が気がついていない様々な情報や記事内容・企画などがありましたら、一言お声をおかけ下さい。

受け付けは常時行っています。思い立ったが吉日、奮ってご寄稿下さい。

なお、記事の採択については、生研ニュース部会にご一任願います。特定の個人や集団の利害に著しく関わるものについては、掲載できない場合もありますので、予めご了承下さい。その他、投稿についてご不明の点がありましたら、いつでもお問い合わせ下さい。

今年が生研60周年。人間でいうところの「還暦」です。50周年に比べたら……と考えがちだった我々ニュース部会員も、「還暦」と気がついたら、何かしたいと思い始めました。還暦＝ターニングポイントですから。そんな生研に向けて、厳しくも優しい皆様の視点をぜひ言葉で残して戴けたらと思っています。

(生研ニュース部会長 小倉 賢)

CAMPUS TOUR

ラウンジのピアノでちょっと一息！

生産技術研究所C棟の笠岡ラウンジとE棟ラウンジに電子ピアノが設置されていることを皆さんご存知でしょうか？こちらのピアノ、所内の親睦を深めることを目的に活動している弥生会が活動の一環として購入したもので、昨年度設置されました。どちらのピアノもとても高機能なのですが、ここではC棟ラウンジのピアノをご紹介します。所詮は電子ピアノだろ、と思って侮ってはいけません。このピアノがなかなかすごいのです。ちょっと見ただけでは、本物のグランドピアノ？と勘違いしてしまいそうなその形状はグランドピアノの優美さを表現したものです。さらに鍵盤には木製鍵盤を使用し、グランドピアノと同様のハンマーアクションを採用することでグランドピアノのタッチ感により近づけているそうです。また、本物のグランドピアノのサンプリングから生まれた音源、微妙なタッチの違いをも区別するセンサなどなど、様々なところに工夫が凝らされています。実際に弾いてみるとその弾き心地、微妙なタッチの変化へのレスポンス、表現力には驚かされます。

こんな素晴らしいピアノがあるのに使わないのはもったいない！ということで仕事や研究の合間の息抜きとしてぜひ活用したいところです。普段からピアノを弾く人も、昔はやっていたけど今は全然、という人もこれを利用してリフレッシュすれば作業効率アップも間違いなし。今

までピアノなんてやったことない、という人も新しい趣味として始めるのもいいかもしれませんね。もちろん自動演奏モードもついていますので、懇親会や歓送迎会などでラウンジを使用する際は、自動演奏モードを使用してこれまでとは違った雰囲気を出してみたいはいかがでしょうか？

なお、C棟、E棟とも使用時間は6時～9時、12時～13時、17時～24時で基本的にはヘッドフォンをつけて使用することになっています。他の方々に迷惑にならないように気をつけつつ、ぜひ活用したいですね。

(情報・エレクトロニクス系部門 高宮研究室
博士1年 安福 正)



• PROMENADE •

“A man walks into a bar...”

I arrived in Japan approximately 1.5 years ago from the United States, where I was born and raised. Although I have some Japanese ancestry, I have experienced both frustration and pleasant surprise at some of the cultural differences between Japan and US. The differences that have been difficult to process arise from what constitutes humor. Of course, this issue is further complicated by the fact that there are cultural influences on humor as well as the individual's particular sense of humor. Finally, but maybe the most important factor in my case is the language barrier.

In the US, the majority of the comedy comes in the form of situational and animated comedies on TV that tell a story based on some theme, satirical news programs, bloopers and stand-up comedians. It seems to me that the humor and comedy in the US is based on some combination of sheer ridiculousness, insult, self-deprecation, double entendre, and irony.

From the outside, Japan may seem a bit stiff, overly formal, and perhaps lacking in the ability to laugh at itself. This, of course, is a gross over-simplification. While some of these elements might be accurate sometimes, this picture is incomplete; one need only turn on the TV to see the lighter, humorous side of Japanese culture, as anyone would acknowledge after watching an *O-Warai*, a type of comedic variety program. After being here for some time, it has become increasingly clear to me that the essence of humor overlaps to a large degree. Furthermore, with the recent influx of Japanese-style extreme game shows such as *Takeshi's Castle*, *Ninja Warrior* and *I Survived a Japanese Game Show* into the US market, I believe that these stereotypes will begin to change.

One area that seems a little different is in the use of irony. In common with many other English words,

the term “irony” has been assimilated into the Japanese language. Before that, though, it seems that it would have been translated as *hiniku*, a phrase that also encompasses sarcasm and cynicism, while irony does not, necessarily. The use of irony or ironic situations has been the foundation for many popular humorous TV programs in the US, one of the most famous being *Seinfeld*. However, there doesn't seem to be the equivalent here, or, perhaps I haven't found it yet.

In addition to this, I have been quite surprised by the fact that there don't seem to be stand-alone jokes in Japanese in the same way that they exist in US. For example, the archetypal English language joke begins “A man walks into a bar, and...” The short story that follows ends with a so-called “punch-line” where the listener is presented with an ironic or ridiculous outcome that is intended to provoke laughter. From talking with colleagues, these sorts of stories do exist in Japanese, called *Kobanashi* (literally, short-story) and end with an *Ochi*, which is a punch-line, but don't seem to be told often. In my laboratory, I often attempt to make jokes but my efforts are often referred to as *American-gyagu* or *oyaji-gyagu*, which mean American gag/joke and old-man gag/joke, respectively. These attempts at humor typically take the form of a play on words or witty remarks. I have come to realize that people laugh when it is truly funny whereas these labels are applied when the joke has fallen short of the intended target. These sorts of silly remarks are irresistible but difficult to perform well! Perhaps the fact that the jokes are not more favorably received is due to the audience rather than my delivery? After all, everyone naturally knows “funny” when he or she hears it. Expressing why that is, however, is difficult.

(マイクロメカトロニクス国際研究センター 竹内(昌)研究室
博士研究員 Utada Andrew S. U.S.A)





FRONTIER

人と車の安全安心のための センシング技術の研究

戦略情報融合国際研究センター 准教授 上條 俊介

ITS (Intelligent Transportation System) (高度交通システム) の技術は、交通事故の削減や渋滞緩和のための切札として、近年注目され始めています。実際、わが国を始めとしたEUや米国の世界各国において、交通事故を削減するための技術開発が、国家プロジェクトとして行われています。

当研究室では、画像認識や人間工学等を基礎とした融合的研究を行っています。現在では、ドライバーが事故を事前に回避できるよう、安全運転を支援するシステムが実用化し、全国各地の高速道路や一般道において、社会実験が行われています。ITSという研究分野の面白さは、危険を検知するセンサー技術、ドライバーに危険を知らせる際の人間工学、システムを普及させるための社会学等を融合させて研究を行える点にあります。

具体的には、安全運転支援ナビシステム (図1)、車載型センシングシステム (図2) の開発を行っています。

安全運転支援ナビシステムは、道路に設置したカメラやその他のセンサーが交通状態を瞬時に理解し、危険な状態を前もってドライバーに知らせるシステムです。車載型センシングシステムは、車に搭載したカメラやその他のセンサーが自車両の周りの状況を理解し、歩行者の飛び出しや車両の死角等による事故を回避する支援をします。

また、海外のテロ事件等を発端として、わが国においても人が往来する公共空間の安全安心を確保する技術への需要が高まっています。

当研究室では、近年増加しつつある監視カメラを活用し、カメラネットワークが自動的に、人物挙動を理解し、犯罪の発生検知や未然防止に役立てようとしています。このような技術が完成すれば、普段のカメラ映像を常時記録する必要がなくなり、プライバシー問題との両立が図れると期待されています。



図1



図2



図3

■編集後記■

最近の休暇や働き方に関する状況の変化に驚きます。私の子供が通う小学校では、週休2日による授業コマ数の減少を回避するために二学期制を導入しており、成績表を受け取らずに始まる夏休みや、10月にある1日だけの秋休みに、私のような古い人間は違和感を覚えます。一方、一昔前に働き方の柔軟性を促進するとしてもてはやされたフレックスタイムの勤務を、

最近、廃止する企業が相次ぎ、定時出社する会社員による通勤ラッシュのピークの先鋭化が起きています。かと思えば、不況による会社の生産調整のための一時帰休により、あまりうれしくない週休3日の生活を送る会社員も珍しくありません。あなたは自分の休暇や働き方に満足していますか？

(高宮 真)

■広報委員会 生研ニュース部会
〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1
東京大学生産技術研究所

☎(03)5452-6017 内線56017、56018
■編集スタッフ
小倉 賢・藤村 隆史・金 範俊
高宮 真・竹内 渉・三井 伸子
E-mail : iisnews@iis.u-tokyo.ac.jp
生研ホームページ
<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/>